伊勢神宮の神聖な森

伊勢神宮は、日本を代表する神社の一つです。太陽の女神である天照大御神を祀るこの神社は、2,000年以上の歴史を持ちます。伊勢神宮の境内には約125の神社があり、そのうち最も重要なのが内宮（皇大神宮）と外宮（豊受大神宮）です。内宮の周囲には「宮域林」と呼ばれる緑豊かな鎮守の森が広がっています。

伊勢市の面積のおよそ4分の1を占める宮域林には、約5,500ヘクタールの敷地内に850種以上の植物が生育しています。宮域林はこの地域の生物多様性を支えるとともに、洪水を防ぎ、地下水や付近の河川の水質をきれいに保つことに貢献しています。また、この森は伊勢神宮の最も重要な伝統のひとつ、式年遷宮においても重要な役割を果たしています。

式年遷宮とは、20年ごとに内宮と外宮をはじめとする諸神社を隣接する区画に丸ごと建て直し、それぞれの神社の祭神を新しい社殿に移す儀式です。社殿は新しいヒノキ材を使って建てられ、古くからその大部分が宮域林で切り出された木材でまかなわれてきました。

1923年、伊勢神宮は、この神聖な儀式に必要な資源を将来世代にわたって維持できるよう、200年計画のヒノキ植樹事業を開始しました。この野心的な森林管理事業は、最終的に式年遷宮に必要なすべての木材を宮域林でまかなうことを目指しています。スギの苗木周辺の下草を刈り払い、間伐を行なって、最も強いヒノキがよく育つよう環境が整えられています。

現時点において、この事業は順調に進んでいます。2013年の式年遷宮では、使われた木材の約25%が宮域林から調達されました。この事業は非常に長期の計画で行われており、事業の完了を見届けることができるひとは誰もいないため、次世代の人々の参加・協力が不可欠となります。